「私は名ばかりの王にはなりたくない」

——ルートヴィヒⅡ世死後100年を迎えるにあたって，
このバイエルン王の風変りな神話が再び盛んである。——

H. ヘフル/J. ライマン
岡　光　一　浩(訳・あとがき)

100年前謎に包まれたようにシュタルンベルク湖で溺死したヴィッテルスバッハ家の王ルートヴィヒⅡ世は死後バイエルンの世界的な人気者となった。彼の華麗な城や宮殿を訪れた者はこれまで数100万人にものぼる。今年は，この伝説的なメルヘン王の記念式典が山火や噴水演奏，馬車パレードやヴァーグナー音楽などによってとりわけ盛んに行なわれるであろう。ルートヴィヒⅡ世の研究家たちのあいだでは，当時ひとりの精神病の男が自殺しようとしたのか，或いは君主が政治的陰謀の犠牲になったのか，について相変らず論争が交されている。

バイエルン州刑事局（LKA）の国防局長であり，かつ刑事部長であるヴィルヘルム・ヴェープキング（50才）はシュタルンベルク湖の800mの長い東岸線を何度も歩測し，「きびきびと歩く速さ」で，その所要時間が平均9分であることを書き留めた。

その後，彼は湖のなかを歩き，岸の斜面を調べ，砂利の地底を調査し，精確に岸からの距離を測り，そのいくつもの場所の深さを測定した。犯行現場が水のなかであることは動かない事実であった。すなわち水のなかに，ひげをたくわえた男性の，服を着けたふたつの死体が発見されたのであった。

死者の一人について，ミュンヘンの刑事部長はすでに公式の解剖鑑定書から，かなり詳しいことを知っていた。つまり，この死者は191cmの「非常に目立つ身長」と腹や胸の「法外な大きさ」に比べて，死体の「頭がいは小さく」，脳の重さは僅か1349gであった。

死体のなかで特に目につく特徴は，「頭皮が非常に厚い」「筋力が非常に力強い」「上顎骨にほとんど歯が残っていない」「外生殖器が充分発育」，膝や顔に僅かな引っかき傷があるほかは全く傷がない，などである。

州刑事局の部長ヴェープリングはミュステリアスな一世紀に一度といってよいこの事件のために，湖岸での捜査と法医学上の書類の厳密な調査に没頭した。つまり，1886年6月13日の湖でのあの死亡事件から今年はちょうど100年目にあたるのである。2人の死者は精神科医ベルンハルト・アロイス・フォン・グッデン教授62才と，巨大なバイエルン王ルートヴィヒⅡ世40才であった。

いったい何が起ったのか。王は，逃走中であったのか，或いは自殺しようとしたのか。グッデン博士は，王を水の中へと引っ張り込んだのか，或いは王を引きもどそうとしたのか。命を賭けた争いがあったのか，或いは全く未知の謀殺が行なわれたのか。

以前検事や裁判官を勤めたことのある刑事官吏ヴェープキングが湖岸で発見したことやヴィッテルスバッハ家の秘密公文書で探しだしたことは，400頁超える，「ローゼンハイム希覯本」シリーズのなかの一冊としてちょうど出版されたばかりである。〔原註，ヴィルヘルム・ヴェープキング『バイエルン王ルートヴィヒⅡ世の死』，ローゼンハイム出版，416頁，49.80マルク。〕この書物の調査結果は，おそらく「精神錯乱状態」の君主がまず最初に精神科医のグッデン博士を殺し，そのあと自分自身を死に追いやった，つまり自殺したのであろうというものである。

ヴェープキングのこの著作は5000以上のタイトルを数えるルートヴィヒ文献目録を載せている。ローゼンハイム出版社はこの新刊書を次のような言葉で賞讃している。この本を読む者は，「ルートヴィヒⅡ世の死について，何が明らかになったかを知るであろう」，そしていずれにせよ，ヴェープキングは「すべてにおいて，推測の域を超えているのである」と。

しかし，おそらくこのヴェープキングの書物も何の役にも立たないだろう。堅固な君主主義者たちは再び古い伝説を持ちだし，そのなかには，ルートヴィヒは背後から発射されたプロイセン人の銃弾の犠牲になった，というものさえある。そのうえさらに，調査したヴェープキングが生粋のヴェストファーレン生まれであったために，彼は自分たちの愛する王が「汚された」と声を大きくして訴えるルートヴィヒ王親衛隊の人たちの怒りを背負いこむことになってしまった。

犯罪捜査的な熱意では王へのいろんな形の崇拝を決してもはや処理しきれないだろう。ヨーデル，アルプス，フェーンそしてホーフブロイハウスとともに，ルートヴィヒⅡ世は比類なき存在であり，ずっと以前からバュヴァール人，つまり生粋のバイエルン人の財産目録品のひとつであった。すなわち，彼は気さくで強大で，若い時には魅惑的な美しさをもち，バイエルン各地の華麗で栄光に満ちたす

べてのものの源であり，淡青いバイエルンの空や10月祭を生み出した神にも等しい王であったのである。

今日までルートヴィヒⅡ世は古いバイエルン人たちの心のなかに大衆の君主として庶民的な王として生き続けている。戦争嫌いでキッチュ，愚かな城の主でヴァーグナー熱狂者と，どこまでも風変りな王としてルートヴィヒは世界的に有名になった。彼は流行の先駆人的要素をつねに自分の引出しのなかに包み込んでいる人物といってよかった。つまり彼は，ホップ王の，初期ヒッピーの，同性愛の極楽鳥の，あらゆる社会的規範から全く背を向ける人の，一種の大曲馬団ロンカルリにあえて扮する愉快な夢想家の，昨年映画のなかで観客を魅了した高慢ですぐにも陽気な気分に変ってしまう天才「アマディウス」に似たアンファンテリブルな（社会的配慮に欠ける）人物の先駆けと考えられるのである。

ミュンヘンのジャーナリストであるフランツ・フーゴー・メスラングは次のように言っている。「到底阻止できない力で，彼は心情と夢想との芸術的空間のなかで揺れている」（『ルートヴィヒⅡ世，死後の生』）と。夭折した国王殿下の神話はこれまで１世紀もの間生き続けたが，記念祭の今年になってさらに彼の神話は非常に風変りな展開をみせている。

食事や酒盛りが，祝祭や旅行が，いやそれどころか学習会がこの王を記念して行なわれる。いずれにせよ，「ミュンヘンの教養活動」は普段神学や教育への傾向をもっているものが多いが，今回のルートヴィヒⅡ世に関するコースはすべてにおいて早くから満員となっている。歴史セミナーでは「メルヘン王とその時代」と題して学習会が開かれ，その実践的な理解のためには，「ルートヴィヒⅡ世の跡を訪ねて」という１週間の旅が組まれている。

ヘレンキームゼー，リンダーホーフ，ノイシュヴァーンシュタインというルートヴィヒⅡ世の３つの城や宮殿だけで，訪問客は毎年250万人を超え，入場料の収入はおよそ850万マルクにのぼるが，州内の城や庭園や湖を管理するバイエルン管理局は記念祭の今年になってついに，ヘレンインゼルに博物館を建てようとしている。

州都ミュンヘンはこの王の年にいろんな特別な催しもので観光客を魅きつけようとしている。みやげ品店は記念ビールジョッキやルートヴィヒ石鹸，王の皿や石膏胸像を並べている。

ミュンヘンのカーニバルではこれまでいつもこの王の豪華な仮装をみることができた。今年のホーフブロイハウスでの伝統的な「フィルス舞踏会」では優れた医者ファイト・ラッテンフーバーがこの寓話になる国王陛下に扮し，実に素朴な

バイエルンの民族衣裳を着た億万長者のフリードリヒ・カール・フリックと気さくに握手をした。

バイエルンの銀行や貯蓄銀行はルートヴィヒの肖像画のついた金の記念硬貨と金の延棒を発行した。連邦郵便局は王の記念祭を祝して60ペニヒの郵便切手を発行する。ヴィッテルスバッハ家のルイトポルト公はカルテンベルクの城醸造所に黒の「ルートヴィヒ・ビール」をつくるように命じた。そして飲食店は，例えば，王の死の場所から遠くないベルク湖畔のホテル・レオーニにみられるように，記念祭のためにメニューをつけ加えた。そこでは毎週月曜日の夜，1884年8月28日のホーエンシュヴァンガウでの王の食事を追憶して「ルートヴィヒⅡ世祝賀メニュー」が準備される。

献立の料理はカクテル「ヴィッテルスバッハ家」，ブイヨン「オルレアン」，子牛の胸腺をつかったコロッケ「ボナパルト風」，鶏肉「財政家風」，ピーチオムレツ「伯爵夫人風」の順序で出される。この85マルクの料理のメニューは「ルートヴィヒ王ピッコロシャンパン」で締めくられる。その時のグラスは持ちかえることができる。

バスによる「王めぐり周遊の旅」が充分に高貴でないという人には，4月からはランダウ式馬車や6頭立ての馬車に乗って騒音を響かせながら王の城を次々と巡ることができる。御者は王家の制服をつけることになっている。

ルートヴィヒⅡ世は再び，キッチュ，商業，芸術にとっての恰好の題材であることが示される。バイエルンの舞台とコンサート会場はルートヴィヒに関する行事に合せて設備の変更がなされている。王が生涯ほとんどみむきもしなかったシュヴァーベン地方のアウグスブルクではバレー支配人エーリヒ・パイヤーの指導のもとに，王の事件がダンスで演じられる。小さな各市町村ではともかく，「国王ルートヴィヒⅡ世記念コンサート」が行なわれる。

この100年祭のクライマックスはシュタルンベルク湖での大花火大会であろう。松明を燃やした何隻もの船が王の死亡したこの湖の波を押しわけて進み，ルートヴィヒⅡ世が従姉のオーストリア皇后シシ（エリーザベット）との出会いを大変楽しんだバラ島をレーザー光線が照らし，そして湖岸の「死亡現場」の巨大なスピーカーからはリヒァルト・ヴァーグナーの音楽が「もうもうとたちこめる霧のように」湖の上に流れ出ることになっている。この花火大会を企画するのはバイエルン国立オペラ劇場の実験舞台の指導者で50才になる作曲家ヴァルター・ハウプトである。彼は以前すでに，ミュンヘンの旧市街をすべて「楽音の雲」のなかに沈め，また1984年にはウィーンの職業夢想家アンドレ・ヘラーのベルリーン平

和花火大会のために音楽を作曲したことがある。

バイエルンの大蔵大臣マックス・シュトライブルはハウプトの「王に棒げるレクイエム」にすでに許可を下した。尤も，正統派の「ミュンヘン，ルートヴィヒ王クラブ」の会長で，小道具方のハンネス・ハイドルは，この狂気騒動を「グロテスクな楽しみ方」であり，「精神医学の病例」のひとつとみなしている。

これは下品なあてこすりというものである。王が本当に狂っていたのか，或いはとてつもなく良い状態であったのかは，100年祭の今年においても高い学問的段階で検討され続けている。3月の半ば，シュヴァービングのマックス・エマヌエル・ビール会社でのパネルディスカッションにおいて，心理分析学者，神経学者，精神医学者がこの面倒な問題に，つまり「実際，ルートヴィヒⅡ世はどんな病気だったのか」に答えをだそうとした。

永遠に解決できないこのような謎は，ルートヴィヒ神話の真の生命の水でもある。もしその謎がなければ，おそらく彼の神話は，そのなかで大変生き生きと生き続けているルートヴィヒもろともただちに冥土に落ちてしまうだろう。

「おお！主よ，今，王閣下は実際に，王の紫衣を着ていらっしゃいます！」と書いたヘートヴィヒ・クルツ・マーラーと違って，もし大衆作家たちが王についてお涙ちょうだい式に描かなかったならば，死んだこの王の一体どんなことが後のちまで語り継がれてきたであろうか？いつもは狩り場ヴィンネトゥやオールド・シャッターハンドのことばかり描いてきた大衆作家のカール・マイも，この度『幸福への道』という題で，ヴィッテルスバッハ家について6巻のアルプス物語を書いた。

ぎこちないバイエルン方言をちりばめて（「えっ，ちくしょう！」Was? Himmelsakra！），ザクセン生まれのこの物語作者はルーベツァールなる王者の英雄的行為を描写している。この王者はバイエルンの山のなかで，手に棍棒をもって秩序を保ち，アルプス高原の「ムーレン・レーニ」を野生の熊から守っているのである。

ルートヴィヒ死後1年して，大衆向きの手頃なレクラム一般双書でルートヴィヒⅡ世について5章の伝記が出版された。そのなかで王は，「祖国の故郷の湖」での死を求めて，「湖の王であることを私は望む！それでこそ初めて実際に王といえるのだ！」と述べている。

すでに当時，王のドラマには感傷的な要素がいくつも付け加えられた。すでに当時，湖での王の死は流行の輸出品でもあった。ゲーテの『ファウスト』を母国語に翻訳していた日本の医者森鷗外は，1890年に発表した小説『うたかたの記』

（ドイツ語訳では1976年に『波の泡』という題で出版された）において，非常に独特な異説を展開している。つまり，そのなかで王は少女の乗っているボートに泳ぎ着こうとして溺死するのである。

日本人は今日，アメリカ人に次ぐ海外からのルートヴィヒ観光の主たるメンバーである。アメリカ合衆国はこの君主と彼の城をすでに完全に独占しているといえる。例えば，パンナムはノイシュヴァーンシュタインを目玉にドイツへの空の旅を募っているし，バヴァリアの「狂った王」がドナルド・ダックやミッキー・マウスに匹敵するものとなっているカリフォルニア州のディズニーランドでは，コンクリートと石膏でノイシュヴァーンシュタイン城の模造が建てられている。

『ニューヨーク・タイムズ』からカリフォルニアの『サクラメント会報』にいたるアメリカの新聞は目下どぎつい見出しで，「狂王ルートヴィヒの夢想」について報告し，読者に「バヴァリアへゆこう！」と誘っている。そして，数100万のドイツのテレビ視聴者が毎週のように「ダラス」に目をむけているというのに，ダラスは「王のおとぎ話」や２月の「ダラス・ラジオ・ショー」が記録にとり憑かれるように「おそらく全世界で最も有名で最も多くの写真に登場する城」と報告している，この王の「夢の城」に目をむけているのである。

テキサスの地方放送局の見解によれば，ルートヴィヒは全く，「シュバルツヴァルトのカッコウ時計のようには狂って」いない，せいぜい「いくらか風変りであるにすぎない」という。

ルートヴィヒの特異なものに対する興味は，父マクシミリアンⅡ世の脳死の後，19才足らずで彼が1864年３月10日の嵐と吹雪の日に王に任命された時，すぐにも現れた。

ルートヴィヒは，かなり楽しみの少ない子供時代の大部分を過したアルゴイ地方の両親の城ホーエンシュヴァンガウにひきこもり，自分の寝室の改造に没頭した。

王のベットの横にはいくつもの岩が重ねられ，その上には人工の滝が流れ，回りは植木鉢のオレンジの木にかこまれ，月や星の輝く人工の夜空におおわれていた。複雑な鏡の仕組で人工の虹とありとあらゆる月相の表現が可能であった。

すなわち，数世紀も続いたヴィッテルスバッハ家の王座に今や，「王としての任務にとって必要とされるすべてが欠けながら，民衆の心からの一致した共感というただひとつのことだけは欠けていなかったひとりの青年」がついたのであった。いずれにせよこのように，ミュンヘン大学バイエルン史の正教授である歴史家アンドレーアス・クラウスは批判的に語り，さらに次のようにも言っている。

「王は決して民衆の共感を得ようと努力したのでもなく，また，こうした共感をどうしたらよいかそもそも何も知らなかったにもかかわらず，どうして王が民衆の共感を得たのかは，おそらく今日まで依然として謎のままである」と。

確かに，まだ非常に若いこの王はその優美さとエローティシュな魅力によって，上流社会の女性たちだけでなく，堅い軍人や高級官吏までも魅了した。バイエルン民衆のこの君主に対する忠実さは，君主が後に世の中から逃れ，洞窟や鏡の間からなる夢の国に逃避した時も，決して変ることはなかった。

このバイエルンの支配者は決して民衆の王ではなかった。彼にとっては「大衆は軽蔑すべき存在」だった，とリヒャルト・ヴァーグナーは伝えている。困難な時期には「簡単に抹消できるように」，バイエルンの「民衆が自分にとってやっかいな存在」であることを彼は願ったのであった。民衆がやってきた時，彼はこの下層民たちを近づけなかった。多くの出動警官隊がつねに英国庭園のまわりを遮蔽しねばならなかった。彼らは国王陛下のひどいノイローゼを癒そうとしたのであった。

ルートヴィヒ神話を包みこんでいるいつものもうもうとした霧のようなものを取り除くならば，そこには自己陶酔的エゴイストと精神病質者が残ってしまうだろう。産業化と帝国統一の時代にあって君主政治の象徴であるこの王が，なに故によりによって，彼の死後王制主義の偶像に仕立てあげられたのか，そして古いバイエルンの君主主義者でジャーナリストのゲオルク・ローマイアーが熱狂的にいっているような「神聖な王の原像」になったのか，それらの点について合理的に説明することはできない。

こうした点では，ヴィッテルスバッハ家の数多い支配者たちのうちのだれもルートヴィヒⅡ世と比較できるものはいないであろう。17世紀にウィーンからトルコ軍を撃退した青選帝候マックス・エマヌエルも、そして30年戦争の真只中にミュンヘンの王宮を建てさせた選帝候マクシミリアンⅠ世も。

バイエルンの王崇拝はこのひとりの王だけにあてはまるようである。ミュンヘンの聖ミカエル教会の地下納骨堂にあるルートヴィヒⅡ世の石棺は他のすべてをはるかに凌駕し，つねに新鮮な花や礼拝品（「あなたに感謝している市場町プリーンの住民！」）で飾られている。

1825年から1848年までの王であり，ミュンヘンの創設者でかつアイルランドの踊り子ローラ・モンテスの愛人であった祖父ルートヴィヒⅠ世も，今年８月生誕200年を迎えるが，熱狂的に歓迎される孫のルートヴィヒⅡ世のかげに隠れてしまった。バイエルンの最後の王となったルートヴィヒⅢ世も結局，1918年の革命

より3年だけ長く生きのびたが，単に少数の同時代人の回想の中に残っているにすぎない。——妻のマリー・テレーゼとともに管理していたロイトシュテッテンの彼の領地でゴム長靴をはいた「富豪農民」として。

それに比較すると，軍服には飾りを施し，胸には沢山の勲章のつけ，髪には毎日新しくこてをあてて縮らせ，足には非常にきらきら輝くトップ・ブーツをはき，肩にはアーミンの毛皮の飾りのあるマントをはおったルートヴィヒⅡ世は当然豪華な王であった。

「彼はこれまで私が見たなかで一番美しい青年だ。背が高くすらりとしたその姿は完全に均整がとれていた…。老いも若きも，金持ちも貧しい者も，彼が放射する魔法に身動きもできずたちつくしていた」と，この若い君主についてあるオーストリアの外交官は熱狂的に語っている。

ルートヴィヒⅡ世が王になって最初に得たものはシュタルンベルク湖のなかの小さなバラ島（25000グルデン）と，ルートヴィヒⅡ世が少し後になって「トリスタン」と命名した一隻の蒸気船（18000グルデン）であった。このふたつでもって，つまり「世界逃避とヴァーグナー」という2つの有名な響きでもって，この若い君主は22年間の彼の統治の基調を示したのである。

この孤島は諸々の城や人里離れた山小屋の洞窟とともに，国王陛下に益々しばしば起るようになった政治の仕事に対する嫌悪から，彼が喜んで身を隠す時の重要なひとつの避難場所となった。そして，船の進水式は，1865年6月ミュンヘン宮廷国立劇場でのヴァーグナーの『トリスタンとイゾルデ』の初演の少し前にとり行なわれた。

ロシアのアナーキストであるミカァイル・バクーニンとともに，ザクセン王国で1849年の5月革命に参加し，その後チューリヒに逃げた元ドレスデン宮廷楽団長のヴァーグナーはルートヴィヒの偶像崇拝的に尊敬する超自我となった。すなわち，ヴァーグナーはルートヴィヒⅡ世にとって「生の歓喜！最高の善！すべて！」であったのである。

ルートヴィヒⅡ世はすでに12才の王太子の時，ゲルマン伝説の世界とヴァーグナーの著作（『未来の芸術作品』）に没頭していた。王は即位後すぐにも，ヨーロッパのほとんどの国々において作曲家ヴァーグナーを捜索させた。

ヴァーグナーは1860年の部分大赦後ドイツ領域に帰ってきたが，やっかいな債権者から逃れてドイツのあちこちを逃げまわらなければならなかった。ヴァーグナーを結局シュトゥットガルトで見つけだしたバイエルン官房書記官フランツ・フォン・プフィスターマイスターに，王は励ますように次のようにいった。

「ヴァーグナーをいそいで連れてきなさい，彼は私にとって帝国の半分にも相当する」と。

作曲家ヴァーグナーは一等車でミュンヘンにやってきて，さしあたり，あらゆる心配をまぬがれることができた。ロマンティックな元首ルートヴィヒⅡ世は彼に，ミュンヘンの都心に身分相応の宿を与え，彼に御手許金から年額として4000グルデンを与えた。

こうしたバイエルンの王の好意と下賜金はザクセン生まれのこの男の名を世に広め，バイエルンの都ミュンヘンにヴァーグナー崇拝の基地としての国際的名声を与えることとなった。君主ルートヴィヒⅡ世と巨匠ヴァーグナーとは数百回に及ぶ手紙や電報をかわした。王は自分の「唯一すべてであるもの」が欠けることになった時，「苛まれるような苦痛と限りない不幸」を感じたのであった。そんな時の友ヴァーグナーにあてた彼の手紙には祈りのようなものが響いている。「おお，我が神よ！我が魂の救世主よ！来たまえ！」

それに対して，32才年長のヴァーグナーは王と同じ気持ちであることを次のように表現した。「私はいつでも愛する者のもとへゆくように，飛んでゆきます。私は聖杯城にいるパルツィファルの気高い愛の保護者の気持ちです！」と。ホーエンシュヴァンガウの客であった時でさえ，作曲家ヴァーグナーは王のベットにむけて，恋焦がれるような親密な文句を送った。「私はあなたという天使の腕の中にいます！私たちは互いに親しい…。」

「男と女の間の恋文でもこれ以上に情愛深くはありえなかったであろう」と，イギリスのルートヴィヒ伝の作家ヴィルフリード・ブラント（『夢の王』）は注釈を加えている。この２人の友情は気高い知的な同性愛の一般例としてしばしば挙げられる。

しかし，ルートヴィヒⅡ世の祖父のローラ・モンテス事件が宮廷において道徳的に問題視されるようになってからは，ザクセン出身のこの音楽と借金の天才にミュンヘンの市民たちは「ロールス」というあだ名をかぶせるようになった。そして，劇作家フランツ・グリルパルツァーは韻文章でヴァーグナーを次のように叩いた。「怒りをもつ国民たちよ，彼をイーザル河ではなく，債務者拘留所へほうりこめ！」と。

事実，王の寵愛をうけたヴァーグナーは相当のエネルギーと厚かましさをもって，王の御手許金を巻き上げていた。1865年10月，ヴァーグナーは王に平気な気持ちで4000グルデンを要求した。彼は以後，まぎれもない初期資本家のように利子で生活をたてようともくろんだのであった。彼はパトロンである王を次のよう

に励ました。「どうかあなたは私から，あのやっかいで適当とは思えない契約のまどわしさを取り除いてください。あなたは王として私に贈物をして下さい。私がいつか王のこの信頼にどのように応えるかは，どうかこの私の良心におまかせください！」と。

誠実なミュンヘン市民はかんかんに怒った。新聞は「あくことのない貪欲さ」をみせる「限りなく自己を過大評価するこの男」をさんざんけなした。「王から金を巻き上げる音楽屋で，かつては放火殺人犯一味の首領としてドレスデンの宮殿を爆破しようとしたドレスデンのこのバリケード男は，王を孤立させ，彼を根強い革命党の国家反逆的理念のために食いものにしようとしている」と，『新バイエルン急報』は論説している。

ルートヴィヒⅡ世は，内閣政治にまでも口を出して指図しようとする自分のリヒャルトを最初のうちはかばった。だが結局，王は内閣首班ルートヴィヒ・フォン・デル・プフォルテンや官房書記官フランツ・フォン・プフィスターマイスター（宮廷の略号でプフォとプフィ）の圧力で自分の「ロールス」をミュンヘンから追いださねばならなくなった。「おお，私がどんなに限りなく不幸であるか，私の存在の導き手であるヴァーグナーからの別れが私にとってどのように私の命を蝕むものか，あなたは信じることもできないし，わからないであろう」と，王は従姉妹のゾフィー・シャルロッテにあてて書いた。

ルッツエルンのフィーアヴァルトシュテッター湖畔のトリープシェンに落ち着き先をみつけたヴァーグナーは勿論続けて，自分を崇拝する王の好意と下賜金をうけとっていた。「私たちは互いにわかりあっているし，理解しあっているし，愛しあっている。私たちの堅固な鎧を暗い闇の力もうちくだくことはできない」と，王は追放されたヴァーグナーをなぐさめた。

ルートヴィヒはまた私的に接触をとり，簡単に州議会の開会を中止し，ヴァーグナーのそばに留まるために，こっそりと汽車でスイスへ向かった。バイエルンがオーストリア側に味方し，プロイセンとのドイツ戦争に敗れた後の，1866年7月，ルートヴィヒⅡ世はこの親友に退位の計画さえもらした。「私は無力な名ばかりの王にはなりたくない」と。数年後，妻のコージマに「私はルートヴィヒのおおげさな手紙のスタイルに同調したが，それは全く意識的にしたことである」と告白したヴァーグナーはこの度の王の計画にそっけなく反応した。若い君主がどうかぜひとも自分「自身の運命」のことを，また「遠い将来」のことを考えるように，と。――巨匠ヴァーグナーは明らかに下賜金の入らなくなることを恐れた。彼はミュンヘンにむけて次のように書いた。「あなたが今の決心を止めない

なら，私はどんなに不幸だと感じることでしょう」と。

ルートヴィヒは王に留まった。ヴァーグナーは短い強制追放の後再び，バイエルンの都ミュンヘンに帰ってきた。『ローエングリーン』『トリスタン』『タンホイザー』に続いて，『マイスタージンガー』と『ラインの黄金』が，さらにフランスに対する戦争の少し前に『ヴァルキューレ』がミュンヘンで初演された。最後の『パルツィファル』を含めたヴァーグナーの晩年のいろんなオペラはこれまでにバイロイトの「緑の丘」の新しい祝祭劇場で上演された。

ルートヴィヒがヴァーグナーに対する愛の苦しみと観劇の興奮に没頭している間，国のなかでは大混乱が起っていた。自由主義革命が古い支配構造を粉砕し，社会主義と共産主義がヨーロッパの中央の地に姿をみせ，バイエルンでは，例えばミュンヘンの機関車工場マファイやアウグスブルクとニュルンブルクの機械工場マンのような産業界の大企業が初めて生まれた。

領土拡張主義的民族国家的な武力政策は，領土の併合，国境移動，軍国主義的な奇襲というものに熱狂する狂信的愛国心を生み出した。この時期，ヴィッテルスバッハ家の国王ルートヴィヒⅡ世は異国人のようであった。

事実すでにルートヴィヒⅡ世は，バイエルンでいつも高く評価されている狩猟の情熱を「戦闘の前兆」として，戦争の序曲として軽蔑した。つまり彼は，彼のロココ風の宮殿リンダーホーフにムーア人の園亭をつくらせるような，華麗なクジャクの王座に居座る一人の平和主義者だったのである。

しばしば行なわれた山への遠出にも，彼は射撃の音を耳にすることを好まなかった。バイエルンの兵士たちについて，王が一番気にいっていたことは，彼らが大変うまくヴァーグナーの音楽を奏でることができることだった。

バイエルンが1866年6月，プロイセンに対して兵をおこした時，ルートヴィヒⅡ世は軍務につくことを拒否した。彼は戦場に大叔父のカールをおくり，待従武官パウル・フォン・トゥルン・ウント・タクシスや馬丁とともにバラ島にひきこもった。そこで彼は，花火をあげたり仮装舞踏会をしたり，また三重奏団に耳を傾けたり，「卑俗な世界の不快な仕組みから遠く離れて」（パウル），「平板な日常生活という狭い範囲」（ルートヴィヒ）の外側で『トリスタン』初演の記念日を祝ったのであった。

ミュンヘンの市民たちはその間，プロイセン軍の進攻状況を書店に提示された地図で見守っていた。オーストリア連合軍がケーニッヒグレーツ近郊での勝敗を分ける戦いに敗れた時，バイエルンのポーデヴィル銃からは銃声のひとつさえも撃たれはしなかった。

だが平和締結の際，バイエルンは屈辱的な防衛同盟によってプロイセン側に強制的に組み入れられた。ミュンヘンのプロイセン大使ゲオルク・フォン・ヴェルテルン男爵はバイエルンに対して「安楽死」の必要なことを平気で要求し，王を「二枚舌の臆病な道化役者」と，大臣たちを「名だたる惨めな男たち」と嘲笑した。

すでに4年後には，バイエルン人たちはプロイセンとともにフランスに対して進軍しなければならない，という援助協定が厳格に施行された。ルートヴィヒⅡ世は再び愛するアマガウ地方の山々に姿を隠し，数週間連絡が取れない状態だった。セダンに勝利し，フランス皇帝ナポレオンⅢ世を捕えた後には，ミュンヘンの通りという通りには民衆の陶酔した感激の波が沸きおこった。——しかし，王宮の王個人の部室のどの窓も相変らずカーテンがかかったままであった。

その後の1870年11月のヴェルサイユ条約の後，バイエルンは北ドイツ同盟に組み入れられ，いくつかの留保権をのぞいてその主権を失った時，王は再び退位の計画を心に抱いた。

王は喪服を着，さらにカフスボタンとジャスパーの時計の鎖も黒いものを使った。そして彼は弟のオットーに次のように書いた。「このようなことになって，とても残念だ，しかし，変更は難しいだろう」と。その後，プロイセンがいろんな決定権を手に入れた。戦略家オットー・フォン・ビスマルクは次のように言った。これからは頭のおかしいバイエルンの王はプロイセンの王に帝位の申し立てをしなければならない，と。

現実には君主同盟のナンバー2であったルートヴィヒⅡ世は最初ためらった。そして独自の対抗策を，例えば帝冠のローテーションシステムを説いた。つまり，ホーエンツォレルン家とヴィッテルスバッハ家が交代に王位に就き，ベルリーンとミュンヘンが交代に帝都になるというものであった。

だが結局再びルートヴィヒⅡ世は屈伏した。——彼自身が，プロイセンに対して自分の弱い立場を明らかにしたのであった。官房書記官アウグスト・フォン・アイゼンハルトは二度内密に，ヴェルサイユの交渉関係者にあてて次のように書いた。国王陛下のために，どうかフランかグルデンで合計200万の金額を工面して下さい，「一方的に犠牲が要求され，なにも交換がない」というのではおそらくなにも事はかたづかないでしょうから，と。

ほんのちょっとの間に王の負債額はどういうわけか3倍に脹らんだ。ミュンヘンのプロイセン公使ヴェルテルン伯爵はビスマルクにあてて次のように報告した。「バイエルンの王は建築物や劇場のために金詰まりに陥っています。600万グ

ルデンが用意されれば，王はとても喜ばれるでしょう。勿論（バイエルンの）大臣たちに気づかれないようにすることが大切です」，そうすれば，王は「きっと皇帝布告に同調し，ヴェルサイユへゆくことも決心されるでしょう」と。

やがて1週間後，一人の男が姿をみせた。バイエルンの王の興亡に決定的な役割を果した，ルートヴィヒⅡ世の主馬寮長官で国民に「馬係」「馬閣下」とよばれたマクシミリアン・ホルシュタイン伯爵であり，彼はヘリクレスのような姿をした「真にバイエルン人の典型で，かつ生粋のバイエルン型の男であり，荒っぽくしかも理知的で自分の望んだことや要求したことはほとんどすべてやり遂げねばならないような人物だった。」（このように，最初のルートヴィヒ伝の作者ゴットフリート・フォン・ベームは述べている。）

大男ホルンシュタインはヴェルサイユでの交渉とは無関係にイェッセという夫人の別荘で立会人なしでビスマルクと会った。長時間に及ぶ会談の後，ビスマルクは望んでいることを文書にしたためた。いわゆる，「皇帝の書簡」を書いたのであった。

特別に仕立てられたプロイセンの蒸気機関車に乗って，馬係ホルンシュタインはミュンヘンにかけつけ，そのあとさらに，王が再び世界苦と歯痛のためにベットに横たわっていたホーエンシュヴァンガウ城へ急いだ。ルートヴィヒは，ビスマルクが彼のために前もって作りあげていたものをただ書き写し，署名さえすればよかった。ポツダムの王の相棒である任命をうけた皇帝の，「至尊の強大なる王侯よ！愛すべき親愛なる仲間よ縁者よ！」というメッセージをみて，ヴィッテルスバッハ家のこの王がひどく苦しんだことは確かなことである。

「犠牲が強いられた時，言葉の最も完全な意味において，それは私には驚くべきことでした。それはただ悪魔のようなプロイセンの政治が一方的にしでかしたことである」，そしてさらに，「それは本当に自由な決定とはいえないだろう」とルートヴィヒⅡ世は叔父のルイトポルト公に告白した。

そのうえ最初の頃，約束の数100万は届かなかった。1871年1月18日のヴェルサイユでの皇帝布告の1ケ月後，ルートヴィヒの急使ホルンシュタインはもう一度ビスマルクに，「具体的には言う必要のない」「例の事柄」を催促するために，尋ね直さねばならなかった。

例の事柄はあらゆる関係者の生きているうちは内密にされた。ルートヴィヒⅡ世のためのビスマルクの爬虫類基金からの支給は総額520万マルクにものぼった。30マルクの年賦金はたいていホルンシュタインが自分でベルリーンにとりにいったのである。——10％の仲介料を彼は王の同意によってすぐにも手に入れてよい

ことになっていた。最後の支給金はルートヴィヒⅡ世の死の少し前に支払われたが，決して王個人の金庫には入らなかった。

あの優美なルートヴィヒⅡ世が買収されたのか？　それどころか，王が自分を買収するよう要求したのであろうか？　それとも彼はただ，バイエルンの歴史家ハンス・ラルがいうように，正当な「バイエルンの要求」を取り立てただけであったのか？　いずれにせよ，ルートヴィヒの長年の大臣であり，内閣首班である自由主義者ヨーハン・フォン・ルッツ男爵はこの取り引きと「皇帝の書簡」を，後にあからさまに「大がかりなへぼ芝居」と評価した。

ルートヴィヒⅡ世が堕落していたのか，それともそうでなかったのか――ルートヴィヒは自分の弱腰をプロイセンに対する嫌悪でもってすりかえた。ヴェルサイユ条約後は，彼は自分をただ皇帝の「新しい地方」を管理する任にあたっている「プロイセンの長官」のように考えた。

皇帝ヴィルヘルムⅠ世がバイエルンの地を踏んだ時，ルートヴィヒⅡ世はすでに「顔を激しくひきつらせ」，挨拶のために叔父の老ルイトポルトをおくったほどであった。そして彼は，皇帝の生誕日に旗を上げたり，教会の鐘を鳴らすことを完全に禁じた。そのうえ彼は，いまや彼自身「全くプロイセン・ドイツ的」と，そしてさらに「気にさわる人物」と感じるようになっていたホーエンツォレルンの王女であった母を以前よりなお一層避けるようになっていた。――全く「呪うべき帝国主義」は彼にとっては「ひとつのぞっとする出来事」だったのである。

ルートヴィヒⅡ世は最終的に政治の舞台から退いた。彼はもはやほとんど全くといってよいほどミュンヘンを訪れることはなかった。憑かれたように，いまや彼はアルプスに自分の夢の国をつくることに没頭した。「このようなパラダイスを，我々の生きているこのぞっとするような時代を少しのあいだでも忘れることができるような詩的な逃亡の場所を自分のために作ることは必要なことである」と，彼は自分の宮廷書記官に書いている。

テュービンゲンの鮮やかに改装されたヴァルトブルク城やコンピエーニュの森のピエールフォン城を訪れた後，ルートヴィヒⅡ世は友人ヴァーグナーに，ペラート峡谷を望む城跡にあたらしく城を建設したいという希望を伝えている。すなわち，「古いドイツの騎士の城の様式に全く則った」「険しい山の頂きに天界の霊気に包まれた」城を。つまり，それがノイシュヴァーンシュタインであった。

国王陛下は近くにあるホーエンシュヴァンガウ城の「タッシロの間」から望遠鏡で仕事の経過を監視した。「神にも等しい友」ヴァーグナー「のための神殿」の建設に際して，王は労働者や芸術家たちをたえず急がせたけれども，それが出

来上がるのに1869年からルートヴィヒの死の年までかかった。――芸術画家ヴィルヘルム・ハオシルトはそんな状態のなかで，西側の切妻壁に聖母や聖ゲオルクを描いている際に足場からすべり落ち，気絶してしまった。

王には古代的なものを好む傾向があったが，最新式の建築技術を拒否するようなこともなかった。ノイシュヴァーンシュタイン城の建築に際して蒸気機械を動かす建築クレーンが初めてバイエルンにもちこまれた。同じ年に建築の始まったリンダーホーフ宮はまさに近代自然科学の誇る絶妙なる建築物であった。

この宮殿は，バイエルン全体においても最初のもののひとつであるヴェルナー・フォン・ジーメンスによって発明されたばかりの発電機を25基も備えた発電装置によって照らし出された。長さ100メートル，高さ15メートルのヴィーナスの洞窟の水は地下の波だて機によって波だてられ，そこにはカプリ島でみられるような本物の青さが科学実験室で調合されたのである。

ただ，今日大いに讃美されている見物のひとつである地下から持ち上げられる「魔法の食卓」だけはいつもきちんと作動しなかったようである。1872年のクリスマスの少し前，ある従僕は次のような苦情をいった。この食卓の上げ下ろしの際に，マイセン陶器の花が「大変な振動」をうけ，その「比較的大きなバラのひとつが茎から折れてしまった」と。――このことは唯美主義者ルートヴィヒⅡ世にとってはかなりの惨事だったのである。

おかかえ料理人テオドール・ヒーアナイスが伝えているところによると，王はいつも「少なくとも３人から４人用」の食事を準備させた。大抵彼自身，「ルイⅩⅣ世，（フランスの）ルイⅩⅤ世，その女友だちポンパドゥール夫人，マントノン夫人と一緒」の食事であると考えた。例えば晩餐ででもあるかのように，ルートヴィヒⅡ世はときおり自分の想像上の客たちに挨拶し，「彼らと会話をおこなうのである。」（ヒーアナイス）。

フランスの太陽王ルイⅩⅣ世の際限のない絶対主義的支配力をルートヴィヒⅡ世は讃美した。バイエルンはルートヴィヒにとって確かにプロイセンの植民地にすぎないように，そしてあらゆることの包括的な主権を実行するにはあまりにも窮屈なところであるように思われた。そこで，ルートヴィヒは移住を望んだのであった。

２年もの間，彼はミュンヘンの歴史家で，かつ記録文書家であるフランツ・フォン・レーエルに遠くの島々や領土を探させた。コスタリカやヴェネヅエラ，フィリッピン或いはジャワ島のマドゥラのような群島，エジプトのナイル峡谷流域，アフガニスタンのヒンドゥークシュ峡谷，或いはコロンビアのカウカ峡谷が彼の

考慮にのぼった。

しかし，その財源が充分になかった。彼は以前と比べて控え目になっていたが，それでもなお当面のものとして望んだ地中海のマジョルカ島でさえも，このバイエルン王は5000万マルクの金額を工面することができず，手に入れることができなかった。

病的といってよいほど遙かな遠くの国への憧れをもっていたルートヴィヒⅡ世は安価な代償でその埋め合わせをした。壁に異国の国々を描かせ，ミュンヘンの王宮の冬季庭園の奥壁にはヒマラヤや山中の湖を描いた大きな絵を飾った。ナツメヤシやバナナの灌木の植えてある水晶宮にはインド風の小屋やムーア人の部屋があった。こうした環境を完全なものにするためにゴクラクチョウやオウムが飼われた。つまり，これらの鳥は朝にはしわがれ声で「おはよう」と鳴き，王がベットにおはいりになる時には，「おやすみなさい」と鳴いたのであった。

ついにルートヴィヒⅡ世は自分の夢の島を故郷の地域に，つまりキームゼーの小さな修道院の島ヘレンヴェルトに見つけることができた。広大なエッタール地方のリンダーホーフのそばに彼が実際に建てようと望んでいたものを，つまり彼の理想とする王ルイⅩⅣ世のヴェルサイユ宮殿の模倣を，今彼はこの地に建造しょうとしたのであった。「これには金がかかるだろう」「私にはそれがわかる」と彼は秘書にもらした。

この計画は最初秘密のうちに行なわれた。建築段階ではこの宮殿は，「マイコスト・エッタール」或いは「トマイコス・エッタール」――ふたつとも絶対主義的支配者ルイⅩⅣ世の名文句 "L'état c'est moi"（「朕は国家なり」）のアナグラムである――という名で呼ばれていた。後に「ヘレンキームゼー」とよばれるこの宮殿は確かに模範としたヴェルサイユ宮殿には規模の上では及ばないが，けばけばしさと華麗さの点ではこれを凌駕する。――大変重い飾り燭台，数千本の蠟燭，ベットの蒲団に30から40人の婦人が７年間かかわった豪華な寝室。

王はまた，できればアルゴイ地方の小さなプラン湖のほとりに，さらに北京の皇帝の冬の館の模造をつくることを望んでいた。そこで彼は少なくとも専制支配者の中国式の宮廷儀式を演じることを希望したのであった。さらにまた，全くの付けたしで言っておくとすれば，彼は鷹岩の上に大胆な強盗騎士の城（ファルケンシュタイン城）をつくることまで望んだといわれる。だが，それにはただ山上への道と水路ができたにすぎなかった。

その後，財源がとだえた。毎年受け取る年金が400万マルクは充分にあった王の御手許金は底をついてしまった。1877年以来，国王陛下の赤字は年を追うごと

に累積し，1885年終りには，負債額はなんと1400万マルクを超えた。ビスマルクの爬虫類基金の金額ではもはやなんの救いともならなかった。

王私有の金庫は1834年憲法によって取り決められた。バイエルンの君主たちは州議会の決定に左右されないでよいというものであった。予算は王の個人的な財産とみなされ，その代りに，王は普通の市民と同じように法的な責任をもった。——従って，王の御手許金は担保として差し押えられもした。当時すでに債権者の最初の申請が裁判にかけられていた。

資金の調達のために，王は使者や請願者を全世界に派遣した。彼はスペインの女王イザベラ，スウェーデンの王オスカールⅡ世，ブラジル，コンスタンティノープル，テヘランに打診したが，うまくゆかなかった。ごく内輪で，彼はシュトゥットガルト，フランクフルト，ベルリーンの銀行に，そしてさらにパリのロートシルト銀行に押し入ることさえ考えた。しかし，結果としてはそういうことにはならなかった。

王はまた，以前の彼の官房書記官フリードリヒ・フォン・ツィーグラーに，必要な金を「搾取したり，銃で強奪したり」，そして「あらゆる困難なことを除去し，障害をとり除く」ように駆り立てたが，無駄におわった。

こうした苦境に陥って，王はやむえずしぶしぶ好きでもないミュンヘンの政府に借入れを願わねばならなくなった。だが，内閣首班ヨーハン・フォン・ルッツは国王陛下に，「続行中の宮殿の工事とその設備をしばらくの間停止していただきたい」と彼自身の「非常に勝手な見解」を報告した。

予算は私が決めるのだ！と，言っていたルートヴィヒⅡ世は侮辱された。事実彼は，ほんの少しあと大蔵大臣エーミル・フォン・リーデルが節約の提案をもってやってきた時，彼をアメリカに追放するか，或いは少なくとも秘密の命令によって騙そうとさえした。

大臣関係者はみんな一致して王の要求をはねのけた。1886年5月5日の「全国務省報告」のなかで，彼らは王に「最も厳しい，最も確固とした節約」を勧め，全面的な建造中止を要求した。

また同盟を結んでいた大臣たちもすぐにも機会をみつけて，「宮廷宿営地に王が沢山の騎兵を待たせておられることがいたるところで協議にふされ，道徳的に好ましくない行為であると考えられています」と，君主に「率直に厳しい真実を報告した」のであった。

すでにずっと以前から，バイエルン人たちはこのことに関して陰でコソコソ噂をしあっていた。国民のなかでは，この騎兵たちは王がいつも奉公人としてしば

しば必要とする「軽騎兵たち」によって「ホモの相手」と呼ばれた。プロイセン大使の秘書フィリップ・ツゥー・オイレンブルク伯爵はベルリーンへ，「王の最近の愛情関係」や彼の「馬に対する興味」について事細かに報告した。

ルートヴィヒは自分の召使たちに回教徒の服装をさせて，東方風の狩猟用の別荘でのモカ・パーティに集めたり，ある時は，おつきのものを古代ゲルマン風のフンディングの小舎でのみつ酒の集まりによんだりした。お気にいりの俳優ヨーゼフ・カインツを彼はスイスの原始三州に連れ去り，ヴィルヘルム・テルを訪ねての夜の散策で，このやつれた役者は疲れ切るまでフリードリッヒ・シラーの劇の台詞を劇的に生き生きと朗誦しなければならなかった。

自分の同性愛的傾向に王自身非常に悩んだ。いろんな日記の記録は，ルートヴィヒが神にかけての祈りと王としての命令をもってそうした自分の激情と闘ったことを証明している。すでに前述のいろんなメモにみるとおり，彼の日記の最後のヴィーナスの洞窟での召使アルフォンス・ヴェバーとの出会いについての記述は「いよいよ最終的な没落だ（dèfinitivement dernière chute)」という誓いで終っている。これは明らかに彼の湖の死以前の，最終的な没落であった。

女性たちのことをこのメルヘン王はほとんど考慮にいれなかった（「結婚する暇は私にはない。そのことだったら弟のオットーに世話してほしい」)。その後，王は国是の理由から従姉妹のゾフィー・シャルロッテに結婚の申し込みをすることになるが，その後すぐにも彼はこの婚約を破棄した。そしてその後彼は安堵の気持ちから次のように言った。「恐ろしいことは実現しなかった」と。

別離は，シュタルンベルク湖畔のポッセンホーフェンの両親の館で許嫁のゾフィーがひとりのフランスの男爵と慣例である結婚式前夜の無礼講を行なっていた時，公表された。その時ルートヴィヒは湖のもう一方の岸辺で祝いをおこなっていた。つまり，ベルクで彼はベンガルの火や巨大な噴水やオペラの合唱などによる大パーティを始めていたのであった。——ちょうど『千夜一夜物語』のように，とプロイセンの使者ヴェルトヘルンは述べている。

君主のこのきまぐれは多くの同時代人の批判を買った。だが，政治の上での王の相棒であったベルリーンの鉄の首相は，「変り者として生き，そのようなものとして扱われ大事にされる」ルートヴィヒⅡ世の権利を当然のことであるときっぱり認めた。

プロイセンよりもよりプロイセン的なバイエルンの国家官僚主義による学校教師ぶった態度に，ルートヴィヒはがまんがならなかった。事実王が，憲法によって自分で大臣を招聘したり解雇したりできると考えていたことに政府は驚いた。

「議会においては悪質な者は追いだされ，善人がそれにとってかわらねばならない，そして大臣でも役にたたない者は誰であれ，去っていかねばならない」と近侍の従僕ローレンツ・マイルに王は厳命した。

これまで大臣たちは君主とうまくいっていた。しかしついに，王はいろんな気晴しに没頭し，「まさしく岩の最も高い尖端に留まっている時には」国政に口出しをしなくなった。いまや危険を感じた大臣たちは不安になって，王が財源の不足に悩まされ，憲法によって自分の権利を今，急に認めようとするなら，彼はおそらく全く頭がおかしくなったといわざるをえないだろう，と言い合った。

大臣たちの方も，君主が1年以上も政務を執ることができない場合——例えば病気によって——その君主を退位させることができる，という憲法を引き合いにだした。内閣ではずっと以前から，国王陛下を悩ますような材料が収集されていたのである。

内閣首班ヨーハン・フォン・ルッツの仲のよい友である高等医学参事官ベルンハルト・フォン・グッデンの管理下にある「自主鑑定委員会」は王の精神状況の鑑定ために，事実1886年6月のほんの2・3日しか必要としなかった。患者を全般的にみることもしないで，彼らはルートヴィヒを「精神科医の経験からおそらくパラノイア（偏執症）という名で知られている一種の精神病」であり，王は生涯不治とみなさなければならない，と診断した。

この電光石火の診断は外交官たち，宮廷人たち，そしてルートヴィヒの時おりの客たちの報告を根拠としていた。例えば主馬頭リヒァルト・ホルニッヒは次のような奇妙なことを報告している。王は「零下数度の戸外の吹雪のなかで食事をされているのに，…海辺に移されて暑い太陽の光にさんさんと照らされているような気になられたことがあった」，また車を孔雀に引かせて，空を飛ぶという「真剣な願望」を語った，と。さらに近侍の従僕ローレンツ・マイルは，ある時ルートヴィヒⅡ世を横目でみつめた後には，「私は一年間ただ黒い仮面をつけてしか」姿を見せることを許されなかったと，また，召使たちはよつんばいになって這い，王の部屋に入る前に扉を引っかかねばならなかったことも稀ではなかった，と語った。王はいろんな声に耳を傾けたというが，それは表面的であり，召使たちに暴力を働き，客たちをやじりたおし，食べ方も飲み方も不作法であり，睡眠薬のクロラール水化物を口一杯にほおばり，鏡の前で脱臼してみせたり，或いはある時ズボンにおもらしさえした。ルートヴィヒⅡ世が夜の国王唯ひとりのための「特別上演」に自分の宮廷劇場の人々を呼びあつめたのも209回にのぼる，などルートヴィヒⅡ世に不利な報告はいくらでもある。

また王のプロイセン嫌いは時として奇妙な結果を生み出した，といろんな証言は伝えている。例えば，国王陛下はホーエンシュヴァンガウにあるドイツ皇帝の胸像の前を通りすぎる時よく唾を吐きかけられた，と。そして廐番長カール・ヘッセルシュヴェルトは「イタリアでやくざの一味を雇い，彼らにドイツ皇太子を誘惑させ，彼を牢獄に鎖でつないでおけ」と命令をうけたという。

しかし捕えられたのはバイエルン王の方だった。つまり，王は内閣の決定によって公式に禁治産者とされた。馬係ホルシュタインをすべての先頭に，「逮捕委員会」がノイシュヴァーンシュタインにむけて出発した時，ルートヴィヒのその後の精神病院となるはずのベルク城ではすでにすべての準備が整えられていた。つまり，扉には穴があけられ，把手ははずされていた。また，ルートヴィヒⅡ世が真夜中にノイシュヴァーンシュタインからベルクへ運ばれる馬車も，中から開けることができなくなっていた。これはルートヴィヒⅡ世の最後の旅であった。彼がベルク城で過ごしたのは，ただの一晩にすぎなかった。その後の，1886年6月13日の聖霊降臨祭の日の夕食後に彼とグッテンとの散歩の際に起ったことは何であれ，いろんな出来事が今日まで解釈の困難なものとして未解決のままになっている。

ヴィルヘルム・ヴェープキングの綿密な犯罪研究によれば，王は「確実に近い確率」で自殺を望んでいた，という。すでに数日前から，彼は何度も毒を要求し，繰り返し自殺の意志を公言し，そのうえ山林監視員にノイシュヴァーンシュタインのそばのペラート峡谷の落下高度を計らせさえしていた。

ルートヴィヒはヴェープキングによれば，溺死した確率が高い，という，しかし，おそらく心臓麻痺か，或いはショック（水浴死）による死の可能性もあろう。グッテンもまた，前もって絞殺されて水のなかに沈められたか，或いは無意識の状態で殴られたかした後，――意図的か，発作的かは疑問であるが――溺死したということは間違いないことである。

ヴェープキングの犯罪研究とならんで，大量の新刊書のなかではふたつのルートヴィヒ伝が際立っている。著者の，歴史家ルートヴィヒ・ヒュトルとジャーナリストのフランツ・ヘレは神話や作り話に因らないで，人の心を打つようなバイエルン王の肖像を造りあげている。〔原註，ルートヴィヒ・ヒュトル『ルートヴィヒⅡ世　バイエルンの王』，C．ベルテルスマン出版，ミュンヘン，560頁，49.80マルク。フランツ・ヘレ『バイエルンのルートヴィヒⅡ世』，ドイツ出版協会，シュトゥットガルト，400頁，39.80マルク。〕

1886年6月13日の湖での出来事はルートヴィヒⅡ世の命を奪った。しかし，王は人々の心から消えはしなかった。世界的にひろまったルートヴィヒⅡ世崇拝熱

に対してある専門家は，ルートヴィヒⅡ世が「崇拝の対象として傑出していることがはっきり示された」，「誰もルートヴィヒⅡ世ほどには個人的に，目や耳や手でもって理解され，感覚的に認められている者はいないだろう」と述べている。

ルートヴィヒの把握にはいくつもの城や博物館を訪れるのがよいであろう。ルートヴィヒを目で理解するためには，ロマンチックでキチュな絵や，ヘルムート・コイトナー（O. W.フィッシャーと共作）やハンス・ユルゲン・ズィーバーベルク或いはルキーノ・ヴィスコンティの映画フィルムなどを見るのが，また耳で理解するためには，彼が偶像崇拝的に尊敬する友リヒャルト・ヴァーグナーのオペラを聞くのがよいであろう。

バイエルンの住民たちはこれまでつねに，ルートヴィヒⅡ世ファンの感傷的な心や俗っぽい憧れをうまく心得て利用してきた。多くの観光旅行，博物館，いろんなマスメディア，音楽劇場は甘くてメルヘンチックで哀愁のある壮麗なルートヴィヒⅡ世という銘柄品を充分に活用しょうとしている。

ルートヴィヒはリヒァルト・ヴァーグナーにあてたある手紙のなかで予言的に自分の役割を次のように主張している。「たとえ我々２人がもはやこの世のものでなくなったずっと後になっても，我々の作品はなおも後世の人々に，数世紀もの間人々の心を魅了するにちがいない輝かしい典型として役立つでしょうし，そして人々の心を感激で燃え上がらせるでしょう」と。

世紀末の王ルートヴィヒⅡ世――「あとがき」に代えて――

1886年６月13日，バイエルンの王ルートヴィヒⅡ世がミュンヘン近郊のシュタルンベルク湖で謎の死を遂げて以来，昨年ちょうど100年目を迎えた。そのこともあって，この数年ルートヴィヒⅡ世に関する書物の出版が相継いでいる。つい最近も（1987年１月），関楠生『狂王伝説ルートヴィヒⅡ世』（河出書房新社）が刊行された（この本はここに訳出しした『デア・シュピーゲル』の記事も参考にしている）。また以前にも，ルートヴィヒⅡ世に関する我々の関心を換起した名著，渋沢龍彦『バヴァリアの狂王』（『文芸』，1966. 1）や豊富な資料を用いた詳細で着実な評伝，村田経和『ルートヴィヒ』（劇書房，1981）などがある。しかし，現在のルートヴィヒⅡ世熱の非常な高まりにはルキーノ・ヴィスコンティの映画『ルートヴィヒ　神々の黄昏』の大好評が大きく影響しているということができよう。謎に包まれたルートヴィヒⅡ世の生涯を大変美しく郷愁をさそう描き方で

表わしたこの映画に人々は魅了された。その後，ルートヴィヒⅡ世はひとつのブームとなり，彼に関する本が多く著わされた。映画の日本公開に先立って書かれた伝記『ルートヴィヒⅡ世』（須永朝彦，新書館，1980），豪華な写真と文によって王の世界を紹介する『王の夢　ルートヴィヒⅡ世』（撮影・篠山紀信，文・多木浩二，小学館，昭和58年），フランス語で書かれた王の生涯と謎の最期を描く歴史小説『狂王ルートヴィヒ　夢の王国の黄昏』（ジャン・デ・カール，三保元訳，中央公論社，昭和58年），王自身の音楽観を捉えた翻訳『ルートヴィヒⅡ世と音楽』（ローベルト・ミュンスター，小塩節訳，音楽の友社，1983），王の城について建築史の観点から位置づけた『虚構の王国――バイエルンの城』（多木浩二，『ユリイカ』，昭和58年３月），そして，最近の６巻本シリーズ『世紀末の美と夢』（集英社，1986）のなかのドイツ・オーストリア篇には，村田経和『バヴァリア国王ルートヴィヒⅡ世』や高辻知義『リヒァルト・ワーグナー　狂王と楽匠』の寄稿がある。ところで，ルートヴィヒⅡ世が作品に登場する小説としては森鷗外の『うたかたの記』（1890）があまりにも有名であるが，他にも，久生十蘭『泡沫の記――ルードイヒⅡ世と人工楽園』（1929）や円地文子『新うたかたの記』（『文芸春秋』，1975．１）がある。そして現在，ルートヴィヒを主人公にした水野英子の劇画『ルートヴィヒⅡ世』が連載中であるのもルートヴィヒⅡ世人気の大きさを表すものであろう。（『婦人公論　臨時増刊号』，1986年より）。

こうしたルートヴィヒⅡ世ブームのなかで，訳者は昨年1986年，ルートヴィヒ死後100年祭を目前にした３月31日付の雑誌『デア・シュピーゲル』第40巻第14号（Der Spiegel, Nr. 14, 40 Jahrgang）に掲載された『バイエルン王ルートヴィヒⅡ世，死後の生』（BAYERN–KÖNIG LUDWIG Ⅱ, Ein Leben nach dem Tode）と題する特集のなかの Heinz Höfl/Joachim Reimann : Ein Schattenkönig will ich nicht sein というルートヴィヒⅡ世論の本翻訳を試みた。勿論本国ドイツには他にも Werner Richter や Julius Desing などによる優れたルートヴィヒⅡ世論がある。しかし２人の『デア・シュピーゲル』編集員によるこのルートヴィヒⅡ世論には彼の死後100年祭をにらんだ新しさがあることを誰もが理解できるだろう。またドイツにも勿論，ルートヴィヒⅡ世を文芸化したものがある。Stefan George の詩 „Algabal“（1892）や Klaus Mann の短篇小説 „Vergittertes Fenster“（1937）などであるが，しかしとりわけ，ルートヴィヒⅡ世はドイツよりもフランスで人気が高かったようである。ヴェルレーヌ，アポリネール，エレミール・ブールジュ，ポール=ジャン・トゥーレら，フランス世紀末の詩人や作家たちはルートヴィヒⅡ世を自分たちの理想的人物として描いている。

本翻訳で我々は，ルートヴィヒⅡ世がどのような王であるのか，王の死後一世紀もの間人々の心のなかに生き続けたというルートヴィヒ神話がどのようなものであるのか，そして王の死の直後の Hans Carossa が„Führung und Geleit“（1933）のなかで語っているようなルートヴィヒに対する関心や好意や崇拝が100年後の現代でも変ることなく，人々のなかで新たな高まりをみせていることを，しかもそこには彼の精神への人間としての憧れのようなものが潜んでいることを知ることができる。『デア・シュピーゲル』の巻頭の言葉にもあるように，ここには「ルートヴィヒⅡ世の狂った生涯とバイエルンの不思議な王崇拝」が描かれている。

しかし訳を試みて私には，ルートヴィヒⅡ世がくるくるぱあ（パラノイア）であったのか，そうでなかったのか，或いは自殺であったのか，事故死であったのか，それとも暗殺であったのかについて，ここに推論してみるほどの関心もない。ただこのルートヴィヒ論を新たに読んでみて，彼がまぎれもなく世紀末精神の体現者であり「世紀末の王」である，という考えを強くしたことは確かである。そのことについて少し述べてみたいと思う。

ルートヴィヒⅡ世がミュンヘン郊外のニュンフェンブルク宮で生まれたのは1845年，父王マクシミリアンⅡ世の急逝によって18歳半ばで即位したが1864年，謎の死を遂げたのが1886年，このように彼の生涯をみると，すなわち，ルートヴィヒⅡ世の生きた時代はまぎれもなく19世紀である。巷説によって「世紀末」の始まりを1885年とするなら，彼の生涯は「世紀末」の門口においてすでに終っているということになる。しかしそれでもなお，我々は彼の生き方や彼の精神に目を向けるとなると，彼の「世紀末性」に，「世紀末時代精神の体現者」としてのこの王に新たな視点を向けざるを得ないのではなかろうか。ルートヴィヒⅡ世は19世紀の王でありながら，本翻訳にみるとおり，すでに彼は「世紀末精神」の Trendsetter なのである。

ルートヴィヒⅡ世はあまりに若く，しかも急にバイエルンの第４代の国王になったが，王として彼は初めのうち忠実に政務に取り組んだ。公の場所にもしばしば姿をみせ王としての権利を正しく実践しようとする「王」だった。本翻訳にあるように，この若い王は誰にも好かれ，すらりとした190㎝を超える長身で，しかも母親ゆずりの美貌で国民の人気を集めたという。誰もが彼の魅力に「身動きもできずたちつくした」とオーストリアの外交官は語っている。逃避的な孤独な夢の王としてルートヴィヒⅡ世は知られるが，初めから決してそうであったわけではない。

ルートヴィヒⅡ世が「世紀末の王」としての様相をみせるのは，彼の生涯の３

つの現実，つまりヴァーグナー，戦争，築城においてであった。彼のこれらとの関わりにおいて，この王の「世紀末性」ははっきりみえてくる。

ルートヴィヒⅡ世の王としての最初の命令はヴァーグナーの招聘だった。ヴァーグナーの捜索，2人のミュンヘンでの対面，ヴァーグナーへの莫大な経済的援助，創作活動の積極的後押し，蜜月の時期，ヴァーグナーの追放，さらなる金銭的援助と保護，これらはしばしば語られ，本翻訳にもみてとれる。つねにルートヴィヒⅡ世にとって，ヴァーグナーは神にも等しい唯一無比なる人物であった。「救世主」であったヴァーグナーがルートヴィヒⅡ世にとって何を意味したかについて端的にいうならば，ヴァーグナーの作品はルートヴィヒのめざす王としての理想世界であった，ということができる。

ルートヴィヒは少年時代父王の城ホーエンシュヴァンガウで過ごすことが多かった。ここで彼は，パルツィファル，ローエングリーン，タンホイザーなどの中世の騎士の世界に触れる。1861年のヴァーグナーの楽劇『ローエングリーン』の観劇は彼の中世世界への憧れを現実的なものにする。その後のルートヴィヒはヴァーグナーの作品の虜となる。こうしたヴァーグナーを通してのゲルマン伝説世界への耽溺はルートヴィヒⅡ世に，王権というものについての中世的で神秘的な考えを与えることとなった。すなわち，国王ルートヴィヒⅡ世は自分の王権の理想を現実化するものとしてヴァーグナーを捉えたのであった。

しかし，彼の王としてのローエングリーンの世界への傾倒は現実が許さなかった。彼が王となった頃にはすでに，王の権力は失われていたのだった。政治を動かすのは王ではなく，別の機構だった。王は単なる象徴であり，美しい飾りでありさえすればよかった。そこに理想に燃えて王としての権利を主張するルートヴィヒの不幸があった。すなわち，ルートヴィヒⅡ世は王としての力が必要でなくなった時，いや王としての権利を主張するのではなく，ただ単に美しい飾りであることが望まれた時に，「新たな王政復古，神権を得た絶対の王」を強烈に夢みた王として登場したのであった。

ルートヴィヒは絶対的な王としてあることの不可能さを苛酷な現実の政治問題によって強く認識することになるが，それは2度の宣戦，普墺戦争と普仏戦争において最も大きかった。特に1866年の，オーストリアに同調してプロイセンと戦った普墺戦争に無惨に敗れた時，ルートヴィヒは絶対的な王権思想の挫折を厳しく受けとめたといわれる。戦争，ドイツ帝国の誕生，それに伴う王としての権限のベルリーンへの移行，王としての権力の喪失などによって，ルートヴィヒの現実逃避は益々強くなってゆく。それ以後，彼は現実の王ではなく，宗教的象徴によっ

て「王」であろうとしたのである。

従ってその後のルートヴィヒⅡ世の築城熱は「現実のドイツ，特にプロイセンのビスマルクによって起されたドイツ統一化のなかでのバイエルンの危機という現実と古くからある王権神授説の危機，さらに…中世以来の宮廷社会におる騎士（武人）の廷臣化とともに生じた騎士伝説や職匠への憧憬，美しき過去への再生を願う…ロマンティシズムがからみあった」（多木浩二『虚構の王国――バイエルンの城』）ものということができる。ルートヴィヒは現実に「王」であることの不可能を今やはっきりと認識し，現実に対して目を伏せ，夢によって，夢のなかで「王」であろうとしたのであった。ノイシュヴァーンシュタインをはじめとする城や宮殿は，王が「王」であることのできない現実社会のなかに，王が内面的，精神的には「王」であり続けようとしたことを示す象徴であった。

ルートヴィヒは築城とともに演劇への情熱をもつが，これも全く，内面において自分の理想を構築するためであった。彼は国民の前に姿をみせることもなく，城においてもごく一部の青年たちを除いて，誰とも会わず全く孤独の生活を続けた。城はひとえに彼の個人的な逃避の場所にすぎなかった。孤独のなかに，彼は不可能な過去の「王権」の再生を願望したのであった。

ルートヴィヒⅡ世は王権が今まさに燃え尽きようとする19世紀に，なおもただ一人その王権を誇示しようとした王であった。かって栄光の頂点にあった者がある出来事によって孤独を深め，自分の周囲に自分の理想社会を構築し，あくまでもそのなかに沈澱しようとする態度，これはまぎれもなく「世紀末」のそれではないか。私はルートヴィヒⅡ世の生き方に，その内面に，世紀末の作家ホーフマンスタールの初期作品の主人公たちを想起する。現実を見ずして，いや精神的には現実を正確に捉えていながら，あくまでも王としての自己の理想を，中世への憧れを追求しようとするルートヴィヒⅡ世の生き方は，そしてその精神は末期ロマン主義，つまり世紀転換期の新ロマン主義を示すものである。そのことは次のような様々な彼の呼び名からも首肯できよう。――狂王，夢の王，ファンタジーの王，妄想の王，メルヘン王、月の王，影の王，孤独の王，冥府の王，童貞王，キッチュの王，ホップ王，ヴァーグナーのパトロン王，悲劇の王など，どの形容も世紀末の文学にしばしば現れる表現である。ルートヴィヒⅡ世は「世紀末性」の，「世紀末時代精神」の体現者としての王に他ならない。

彼の生は世紀末精神の先取りであり，その死はやがてくる19世紀精神の死を意味する。ルートヴィヒは帝国主義的，資本主義的社会では生きることのできない人間だった。その現実からすれば，彼は確かに狂王だったにちがいない。しかし，

彼の精神は，心は，愛は，主観性は，そして後世に残したいろんな建築物はいまや人々に好意をもって迎えられている。一世紀もの間の彼の人気がそのことを証明している。彼は決して人々から奇異で特異な夢の世界の住民としてのみ見られているのではない。彼の生涯は人間のもつひとつの長所を主張しているということができる。すなわち，ルートヴィヒⅡ世の精神は人間のうちに，人間の精神的内面に合理的思考では捉えきれない部分のあることを，合理的な目では見つめ得ないような世界があることを，そしてそれが場合によっては人間の長所となりうることを我々に教えているように思える。ルートヴィヒⅡ世人気は人間の心が一方では秘そかにそうした世界を求めていることを如実に表わしているように思えてならない。

(S. 62. 4)